第12回日本公衆衛生看護学会学術集会「自分らしく生きる」を支える公衆衛生活動を考える～新たな地域包括ケアの扉を拓（ひら）く～（北九州市）に参加して

結核研究所
対策支援部副部長　永田 容子

はじめに

日本公衆衛生看護学会（Japan Academy of Public Health Nursing）は，平成24年7月21日に発足し，私は2013年の第1回から参加し（途中で抜けたこともありますが），感染症保健の分野で結核に関するテーマの発表が，現場の保健師の方から出されていることから大変興味を持って参加しています。

第12回学術集会の概要

～新たな地域包括ケアの扉を拓（ひら）く～というのは，「地域住民が住み慣れた地域で安心して尊厳あるその人らしい生活を継続する」ために，住民自らが予防の視点を持てるよう，その主体性を高める関わり方を模索することが，今必要であるという意味です。新型コロナウイルス感染症流行以降，初めての全プログラム現地開催となり，オンデマンドもあわせ全国から約1,600名の保健師の参加がありました。

一般演題（結核関連）

例年同様，感染症保健群および国際保健群から，結核に関する演題が6題ありました。

「長期療養型医療機関における結核集団発生に対する保健所の取組みについて（北九州市・花田）」，「中断リスクが高い結核患者への支援（大阪市阿倍野区・宮城）」，「高齢者施設の結核集団発生事例における結核患者早期発見のための取組（文京区・柳瀬）」，「高齢者介護職に向けた結核の教材開発（筆者）」，「BRIDGE TB CARE（結核医療国際連携支援）を活用した外国人結核患者の国境を越えた治療継続のための取組み（福岡県宗像遠賀・西田）」，「ベトナム出生患者への地域DOTSにおける治療中断リスクアセスメント項目―文献検討および専門家意見の検討―（日本福祉大学看護・森）」です。当日発表がないポスターについてはオンデマンド上で意見交換や質疑ができるようになっています。

新型コロナウイルス感染症大流行の間にも医療機関や施設で結核集団発生が起こっており，対応や分析などの必要性を痛感することができ，今後の研修に活かしたいと思いました。

その他

他には，現任教育の発表では大小の職場の規模の違いがあってもそれぞれの良い部分を生かして育成が可能であること，経年的な評価による分析があり，オンラインによるプログラムでは事例演習の限界などの発表もあり，参加者との意見交換が研修のプログラムを企画する上で大変参考になりました。

おわりに

今学術集会での優秀演題賞（研究報告5演題，活動報告5演題）の表彰があり，結核に関する演題（活動報告）では，前述の福岡県宗像・遠賀保健福祉環境事務所の西田氏が受賞されました。結核対策での保健師の活躍を嬉しく思うとともに，若い保健師にも引き継がれていることを実感できた学会でした。

次回，第13回日本公衆衛生看護学会学術集会は来年2025年1月4日（土）～5日（月）に，愛知県名古屋市（ウインクあいち）で開催されます。

筆者ポスター前